

ひまわりからの メッセージ

161号

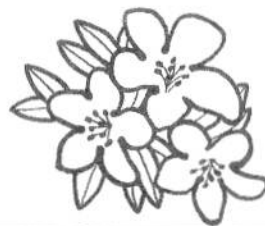
2025. 5. 19.

NPO ひまわりの花内
西濃圏域
発達障がい支援センター

発行人：中野 たみ子

人が輝くとき

～炎のマエストロ～



先日、NHKスペシャル「人体Ⅲ」という番組を偶然見ました。何故人は老いるのか、受精の時から細胞分裂が始まり、細胞分裂が進んでいくことで人は必然的に老いていくのだそうです。今、老化治療薬の研究が進められているそうですが、老いても輝いている人として指揮者の小林研一郎氏が紹介されていました。

小林氏は炎のマエストロと呼ばれている方で現在八十五歳です。その彼に、昨年末、ベートーベンの交響曲の指揮の依頼が来たそうです。それも一曲や二曲ではなく、演奏時間は十二時間という、とてつもなく長時間の依頼でした。迷った末に引き受けられたそうですが、息子さん「生きて帰って来いよ。」と送り出されたとのことでした。

日常生活のご様子は、歩き方や体の動かし方など、年齢相応に見受けられます。息子さんが心配なさるのも当然だったでしょう。楽団員の方は入れ替わりがあっても、指揮は、お一人で立ったまま十二時間ですから……しかし、指揮台に立たれた瞬間、表情がサッと変わりました。そして、とても八十五歳とは思えない体の動きと、タクトの振りに圧倒されました。曲と曲の合い間にはリハビリの方の手を借りながらの十二時間、第九の合唱が終わり、タクトの動きが止まった時、私は思わずテレビに向かって拍手をしていました。

テレビの解説には山中伸弥教授も登場し、老化には、人の体内にあるミトコンドリアが関係していると説明されていました。それと同時にその人自身の使命感というのか、生き甲斐というのか、自身の中に存在する熱い思いが人を輝かしめるのだということを小林氏の映像から知らされました。

結局人はどう生きるのか、年齢を重ねても自分の中の消えることのない熱い思いを持ちつづけていくことしかないのだなあと思います。熱い思いを持った番組でもありました。

庭先に夏みかんの花が咲きはじめです。八朔とちかい猿や白鼻心か手をつけないまま枝には、まだ実が残っています。でも季は否応無しに過ぎていきます。

教育、療育、保育に

マニユアルはある？



最近、若い人と話していると、「マニユアルは無いのですか」と聞かれることがあります。うん、マニユアルがあったら便利だね」と答えて、「でも、無いな」と思うのですが、皆さんはどう考えておられるのでしょうか。

私は古い人間なので、実に多くの〇〇法に出会ってきて、身体に不自由さがある子に対しては、ボバース法、ボイタ法、ドーマン法、心理リハビリテーション、動作法、静的弛緩などがあり（もちろん今も使われています）子どもの発達に関しては、モンテッソーリやシュタイナー教育などが有名でしょうか。モンテッソーリは、約六十年前にもてはやされて障がい児の施設には多くの教具が整備されていました。が、いつの間にかすたれたと思っていました。又、近年、復活しているようです。自閉症の子ども達に対してはTEACCH（ティーチ）や太田ステージといった方法がありました。一時期、アメリカのノースキャロライナで行われていたティーチプログラムでなければ自閉症教育ではないというような風潮がありました。自閉症新薬に

希望をつないだ親さんも多くありました。

心理療法も盛んです。最近ではABA（応用行動分析）や保護者に対するペアレントトレーニングなど、本心に様々な手法が次から次へと押し寄せて来る感じですが、

ただ私は、ある一つの方法の信者のようになってしまわれる保護者や先生方がいらっしゃる現実がとても怖い気があります。私たちは、保育者であったり教員であったり、療育者であったり、少くとも一般の方々とは少し違う立場の人間です。ですから〇〇法といわれるものに無関心ではいられません。目の前の子どもの困りに対して、どんなアプローチがあるのかと常に考えています。学んでいます。

でも考えてみて下さい。例えばASD（自閉症スペクトラム）の子が二十人居るとして、その子達は皆同じでしょうか。ADHDの子どもたちは、皆同じでしょうか。当然一人ひとり違っているはずです。ということば、全員共通のマニユアルがあったらおかしいのではないのでしょうか。

〇〇法を信奉している方々にとっては、こういうことを言う私はまさに異端なかもしれません。でも私は様々な方法を学んだ上で、今、目の前にいる子に対してどの様にアプローチしていこうか考えていきたいのです。安易にマニユアルを求めず、まだまだ学ぶべきことがたくさんあります。

それに、私たちが向き合っているのは、機械ではないですよね。パソコンなら、その手引書にそって操作すれば良いでしょうが人はそうはいきません。まして子ども達は実に面白いです。そう思われませんか？

私は子どもたちに出会うとワクワクします。この子は何を考えているんだろう。何に興味があるのだろう。どんなふうに私がかかわっていったり安心してくれるだろうか。少しでも心を開いて歩み寄ろうとしてくれるだろうか。いや、むしろかたくなに拒んでくるのだろうか……。どんな言葉かけをしようか、声をかけずに、まずそっと近づいてみようか……。等々、子どもたちを前にして、その子の表情やしぐさ、目の動き、体の動かし方、声の調子などを見て、自分の行動を一瞬に決めることになります。そして、その時の反応で私の次のことばや行動を決めていきます。何と心踊る瞬間ではありませんか。

人との出会いってそういうものでしょう。乳児であっても中学生であっても、人と人として向き合った時、「えっ、そういう反応なのですか？」「そうきたの？」という時も往往にしておりますけれども、こちらが「もしかしたうこんな反応かも……？」と、ある程度想定していれば然程驚くことでもありませんよね。大人の側の想像力が乏しいと、子どもの行動の裏にかくされたその子の思いに気づくことが難しいのではないだろうかと思っ

たりするのです。

いくら行動分析を試してみたとしても、大人の側に問題があれば、ただ書類として残したというだけで、本当に血の通った人と人との関係性が生まれるのかどうか……。SSTにしても、「こういう時には、こういう行動をすべきだ」と分かっているとしても、実際の場面で汎化できなければ、その理論の成果と言うことはできません。結局、〇〇法といっても、それを実践する人の人間力(心)といったものが試されるような気がしてなりません。教育や療育、保育といった子育てにかかわる中で私自身が育てられるというのは、まさにそういう力なのではないかと思っております。

手軽なマニュアルを探すのではなく、苦勞しながら自分なりの理論や技能を確立していくことが、大切なのではないかなあと思っておりますが、かく言う私は、何十年もの間悩み、失敗し、子どもたちに支えてもらっているわけですから偉そうなことは言えません。

どんな理論にも完璧はないでしょうし、私たちは人としても完璧ではないのですから、様々なことを学び考えつづけていくしかないでしょう。

若い人達への答になっているでしょうか……。



支援とは何でしょう？



〜支援員研修を終えて〜

今年度は四月からあちこちで支援員の方々にお話させていただく機会をいただきました。

園でも学校でも困りのある子どもたちが多くなり、支援員の方に手伝ってもらっていることが増えました。同時に、その支援の内容が果たして子どもたちの自立につながっているのかどうか、どうしても甘えてしまっている自分やろうとしにくい子や注目要求を満たすために、わざと困らせる子、特性のある子など支援員の先生方は、それぞれにご苦労をなさっているのだらうと思います。

私が支援員の方にお話したのは、次のような点です。

- ① 支援は「引き算」であること。
- その見が必要とする時に必要な手立てで必要なだけ手助けすることである。支援のやりすぎは、かえってその児の自立の妨けになってしまう。
- ② 自分と支援児の対一の世界を作るのではなく、担任と話し合い、集団活動を促していくことが大切。

③ 感覚の困りのある子について特性理解をする等々

ただ西濃圏域の園の巡回をしていると、子どもの要求通りに家来にならなくなってしまっている人や必要以上にやりすぎでしまっている人を見かけます。やってあげたいという気持ちがかかからないわけではありませんが、やりすぎの支援を受けてきた子は、小学校で困ってしまいますし、親さんの学校批判にもつながってしまうこともあります。

支援は、その見が将来支援がなくても自分らしく生きていくように持つていくものです。目の前の「今」だけではなく十年後二十年後を見越して、待つことや気持ちの切り替え、片づけなど生活面のことなどにも目を向けてほしいと思います。このことは、支援員だけでなく親子の関係でも言えることです。

子どもの家来にならないように、家庭のルールも大事にしてほしいですね。

<6月の予定>

4日(水) ヒアサポート
9日(月) センター親の会

成人相談

9日 揖斐川町
10日 養老町
20日 輪之内町
24日 池田町

就学に向けての相談や巡回も始まります。

相談の方、学校との話し合いなどご連絡下さい。

